

# 大学版上級 ID 専門家養成ワークショップの形成的評価： 最終課題へのフィードバックコメントの分析

Formative Assessment of an Advanced Workshop for Instructional Designers in Higher Education:  
Analysis of Feedback Comments to Final Exam

高橋 暁子\*1 竹岡 篤永\*2 市川 尚\*3 根本 淳子\*4 鈴木 克明\*5  
Akiko TAKAHASHI\*1 Atsue TAKEOKA\*2 Hisashi ICHIKAWA\*3 Junko NEMOTO\*4  
Katsuaki SUZUKI\*5

\*1徳島大学 \*2明石工業高等専門学校 \*3岩手県立大学 \*4明治学院大学 \*5熊本大学  
\*1Tokushima University \*2National Institute of Technology, Akashi College  
\*3Iwate Prefectural University \*4Meiji Gakuin University \*5Kumamoto University

〈あらまし〉本研究では、大学版上級 ID 専門家養成講座の形成的評価の一部として、最終課題に対するフィードバックコメントを整理した。その結果、最終課題の指示の改善などが示唆された。

〈キーワード〉 インストラクショナルデザイン、ID 専門家養成、FD、高等教育

## 1. はじめに

著者らはインストラクショナルデザイン (ID) に関する高い専門性を前提とした、特定領域に強い教育設計専門家の養成に取り組んでいる。その中で、関連プログラムの最上位に位置づく「大学版上級 ID 専門家養成講座」(鈴木ほか 2019) を試行した。本研究では、講座の形成的評価の1つとして、参加者の反応と、最終課題へのフィードバックコメントを整理し、次回実施へ向けた改善案を提案する。

## 2. 講座の概要

本講座の目標は「改善対象とする科目の領域に詳しくない ID 専門家が、本講座で提供するツール(チェックリストやテンプレート)を活用しながら、科目担当教員にインタビューを行い、科目や教員の状況と専門領域の本質を見据えた実現性の高い改善提案を行うことができるようになる」である。

講座は大学における2単位分の授業を想定し、約半年間実施した。受講前には前提テストがあり、合格者は事前課題(オンライン)、ワークショップ(対面)、事後課題(オンライン)で構成した。

参加者は大学でFD活動に関わっている(将来関わりたいと考えている)大学教職員9名だった。前提テストに合格すると思われる方々(例えば日本教育工学会FD研修会運営者等)に本講座の形成的評価への協力を募り、承諾を得られた方が参加者となった。

最終課題は「改善提案報告書」を主としたレポート課題である。参加者が科目担当教員に行った改善提案内容と、その結果を受けた振り返りを報告してもらった。最終課題は参加者1名につき著者ら2名が担当し、表1の基準で可否を判定した上で、フィードバックコメントを作成した。

表1 最終課題の合格基準(抜粋)

- |                              |
|------------------------------|
| ①「フォーマット」に沿って必須項目がすべて記述されている |
| ②エグゼクティブサマリーは1ページに収まっている     |
| ③改善提案をした教員との次回面談予約が取れている     |
| ④付録として必須の資料を全て添付している         |

## 3. 研究の方法

本研究では、カークパトリックの4段階評価のうち、Lv.1(反応)、Lv.2(学習成果)を用いる。

参加者の反応については、事後アンケートの満足感に関する設問と自由記述を分析する。

学習成果については、最終課題に対するフィードバックコメントを整理する。今回は「今後のアドバイス」の部分の意味のあるまとまり(段落等)で区切り、第一著者がラベル付けた。

## 4. 結果

### 4. 1. 参加者の反応

事後アンケートは6名が回答した。

満足感に関する設問「本講座をあらためて振り返ってみて、受講してよかったと思いましたか？」(7件法;7が最もよい)について、全員が

7だった。自由記述にはその理由が様々挙げられたが、「ほかの先生方の提案を聞く機会があったこともよかったですね」など、他の参加者との交流を挙げるコメントが最も多かった（4名）。

#### 4. 2. 最終課題へのフィードバック

最終課題は8名が提出した。全員が合格基準を満たしたが、そのうち3名は不十分と判断して再提出を促し、うち2名が再提出した。

再提出を促した3名に対するフィードバックコメントを表2に示す。合計13件のコメントがあり、最も多かったのは「改善提案のプロセスの詳細がわからない」であった（5件）。これは表1の①の記入が不十分であるというもので、2名のレポートに対して繰り返し指摘していた。また、「実現可能性が低い」（2件）は、教員が出来る範囲を超えているのではないかという指摘で、1名のレポートに対して2回コメントしていた。「カリキュラムマネジメントは対象外」（2件）については、本講座の対象外の内容であることを、2名に各1回ずつコメントしていた。

再提出ではなかった5名と、再提出後の2名（計7名分）へのフィードバックコメントを表3に示す。合計12件のコメントがあり、最も多かったのは「将来像をイメージしてから段階的な提案をする」（5件）であった。これは数年後の理想的な授業を検討した後、今できる範囲の内容から段階的に提案してはどうか、というアドバイスである。次に多かったのは「相手の専門領域を掘り下げ、具体案を用意する」（2件）であった。

#### 5. 今後の改善案

本研究の結果から、4点の改善を提案する。

1点目は、最終課題の指示および例示の改善が考えられる。再提出を促すコメントにあった「改善提案のプロセスの詳細」については、報告書に経過時間、提案手順、相手の様子といったプロセスを書くことを指示し、例示をする。加えて、今後のアドバイスで多かった「将来像のイメージ」も、報告書への記載を求める。また、対面ワークショップで将来像を描くワークを行うなど、一旦視野を広げる活動を組み込むことも考えられる。

2点目は、本講座の scope を明示することである。カリキュラムマネジメントや提案方法（プレゼンや交渉）については、本講座では養成しないことを最初に参加者へ示す。一方で、これらはID専門家に求められるスキルではあるので、別

講座の検討や支援ツールの開発はあり得る。

3点目は講座内で用いるツールの改善である。今後のアドバイスであった「相手の専門領域を掘り下げる」活動を支援するため、インタビューに用いるツールの「領域」の質問項目に例示や解説を追加するなどが考えられる。

4点目は、本講座の満足感が高かった理由として挙げられた「他者との交流」を、今後も継続して仕掛けることである。本講座の対象者の多くは経験を積んだID専門家であり、より熟達化を促すためには実践コミュニティの構築が求められる。具体的には、修了者には定期的に本講座内で活動報告をしてもらうことなどが考えられる。

表2 再提出を促すコメントの内容

内容	件
改善提案のプロセスの詳細がわからない	5
実現可能性が低い	2
カリキュラムマネジメントは対象外	2
無理に提案（コンタクト）をしない	1
改善提案の内容の詳細がわからない	1
添付ファイルがない	1
3つの収穫の記述が不十分	1

表3 今後のアドバイスの内容

内容	件
将来像をイメージしてから段階的な提案をする	5
相手の専門領域を掘り下げ、具体案を用意する	2
より受け入れやすい提案を検討する	1
受け入れられなかった原因を検討する	1
目標と内容を整理する	1
フォローアップをする	1
提案方法を改善する	1

#### 謝辞

本研究は文科省科研費（基盤研究B：課題番号16H03081）の補助を受けている。

#### 参考文献

鈴木克明・市川尚・高橋暁子・竹岡篤永・根本淳子（2019）大学版ID専門家養成上級ワークショップの構想とその体系化。日本教育工学会第35回全国大会（名古屋国際会議場）発表論文集，85-86